

和歌は歌われたのだということ

——『伊勢物語』第二十四段卑見——

金 井 利 浩

『伊勢物語』第二十四段の読みのは、どう求められるのであろうか。などと問えば、ただちに、誰からともなく、片桐解⁽¹⁾や妹尾解⁽²⁾、あるいは三木解⁽³⁾があるではないか、との返答が聞こえてきそうではある。

なるほど、たとえば妹尾の言うとおり、第二十四・六十・六十二段を、「妻たる女の身の処し方が反面教師として教訓的に描かれたやや特異な主題を持つ章段群」と捉えることは可能ではあるだろう。ただしそこには、片桐のいわゆる三段階成立説に拠った場合に後期付加章段として括り得るといふ、或る種の先入主による色付けが濃く厚く介在してはいなかったであらうか。

おそらく第二十四段は、『伊勢物語』総体を段序のままに素直に読めば、「女」が「運命に翻弄される悲劇」⁽⁴⁾というべきである。第六十段は、「運命の皮肉を語る段」⁽⁵⁾であらう。第六十二段は、確かに第六十段と相似た、男女の再会譚ではあるけれども、第六十段の湛える「しみじみとした懐旧の情や、抒情性」⁽⁶⁾は、そこに求めようがないのである。言を換えれば、第六十二段を第六十段と一つに括るなど、そう言ってよければ第六十段のために、到底できないのである。

和歌は歌われたのだということ（金井）

ただし、翻つて第二十四段について言えば、「運命に翻弄される」のは「女」ばかりではない、「女」のみが「悲劇」に見舞われるのではない、と読むべきであり、また読み得るであろう、というのが本稿の立場であり、また見通しである。

一 起点もしくは基底としての「三とせこざりければ」

以下、第二十四段を読解するうえで問題視されてきた要素を、いわば各論として、比較的近時の注解や論攷を紹介しつつ引合いに出しながらあげつらつていきたい。

先ずは、改めて本文を見つめるところから始めてみよう。便宜上、定家本系武田本系統静嘉堂文庫本(7)を引く。

昔、おとこ、かたゐなかにすみけり。おとこ、宮つかへしにとて、わかれおしみてゆきにけるまゝに、三とせこざりければ、まちわびたりけるに、いとねむごろにいひける人に、「こよひあはむ」とちざりたりけるを、このおとこきたりけり。「このとあけたまへ」とたゝきけれど、あけで、うたをなむよみていだしたりける。

あらたまの三とせをまちわびてたゞこよひこそにまくらすれ
といひだしたりければ、

あづさゆみまゆみつきゆみとしをへてわかせしがごとうるはしみせよ

といひていなむとしければ、女、

あづさゆみひけどひかねどむかしより心はきみによりにしものを

といひけれど、おとこかへりにけり。女いとかなしくて、しりにたちてをひゆけど、えをひつかで、し水のある所にふしにけり。そこなりけるいはに、およびのちしてかきつけ、る、

あひおもはでかれぬる人をとゞめかねわが身はいまぞきえはてぬめる

とかきて、そこにいたづらになりけり。

さて、「女」が「あらたまのとしの三とせを……」と詠み出だすことになる、その意味でも極めて重要な、基底的前提となる文脈をかたどる「三とせこざりければ」をめぐっては、殊に「戸令」に拠ったか否かが諍われ、諸賢、次のように説いてきた(8)。

○夫婦の間に子がなく、夫が三年間家をあけて帰らない場合は、妻の再婚を認める法令があった。「已に成ると雖も、其の夫外藩に没落して、子有りて五年、子無くして三年帰らざる時、及び逃亡し、子有りて三年、子無くして二年出でざる者は、並びに改嫁を聴す」(養老律令・第四・戸令)。この前半の「没落外藩」が、古来、物語の「三年来ざりければ」を解釈する上で有力な根拠とされてきた。しかし、「三年」は法令に即した叙述であるよりも、夫婦にとつての空白の歳月の長さをいう叙述として重要なのであろう。(鈴木『評解』・語釈)

○宮仕えのために片田舎から都へ行ったのであつて、外蛮へ行つたわけではないから、『戸令』の「外蛮ニ没落シテ：三年帰ラザル時」は、他の男と結婚してよいという条文と関係づけて解釈する説は誤り。

(片桐『全読解』・語釈)
○「戸令」の規定で(…)子がない場合は三年現れなければ再婚してもよいということになっている。(…)したがって、女は夫が出て行つて三年目の日に言い寄る男との再婚を承引したのである。おそらく令の規定をたてにして、言い寄る男が再婚をせついたのであろうが、夫の愛情を信じられなくなった女の心はすでに新しい男の方に向いていたということであろう。／ところか、あろうことか、ちょうどその日に、夫は帰つてきたのであつた。出て行つてから三年目になる日に戻つてきたのは偶然ではないだろう。男は三年目の区切りの日だから帰つたのに相違ない。(妹尾「読解考」)

○韓朋譚でも(概要)に「その後朋は宋国に仕えたが、三年が過ぎても帰つてこない」と語られ、男の仕官と三年

の不婦とが両者で共通する。三年の不婦を『戸令』の（…）条文と関係づける注説（『伊勢物語闕疑抄』が古く『拾穂抄』や旧大系なども従う）もあるが、「ここは男が外藩に没落したわけでも、逃亡したわけでもなく、別れを惜しんで宮仕へに出たのであるから、論理上はこの法令に当てはまらない」（南波浩氏『日本古典全書 竹取物語・伊勢物語』〈朝日新聞社、一九六〇年〉）、「男は外蛮へいったわけではないから『戸令』の条文と関係づけて解釈する説は誤り」（片桐洋一氏『伊勢物語全読解』〈和泉書院、二〇一三年〉）と否定される。（三木「韓朋譚」）

解釈史は、見られるとおり、章段本文の理解を「戸令」の条文と聯絡することの不要や非を説く方向へと傾斜してきた恰好だが、どうやら、「戸令」に拠ったかどうかはさしたる問題ではなく、というよりも、互いに認識も意識もしていたのなら当然に、意識していなかったのなら稀有の偶合として、「おとこ」と「女」とがともに「三とせ」というその日にそれぞれの行動を起こした、その事実こそが重視されるべきなのであろう。すなわち、必然であるにせよ偶然にせよ、「女」はその日を新たな男との関係を始発させるそれへと更新すべく踏み出し、「おとこ」は「おとこ」で、その日をむしろ「あの日」へと戻すべき日と見定めて舞い戻ってきた、にもかかわらず、と言うべきか、だからこそ、と言うべきか、そこに出来たズレこそが本章段のすべての始まりであった、そう読まれるべきではなかったか。

二 「あらたまの」歌の要諦

さて、右に見来たった「三とせ」を詠み込んで、「女」が戸を開けることもなく詠み出だした「あらたまの……」の歌は、いかなる観点から、いかに把握されてきたのであろうか。

○一首は、再婚の夜、諦めていた夫が帰還したのに戸惑う心を訴える歌である。（鈴木『評解』・語釈）

○「宮仕へしにとて、(…)三年来ざりければ、待ちわび」ていたところ、新しい男が登場して、「今宵あはむ」と契った、その日に帰って来た元の男に対してよんだ歌という事情を十分に説明してわかりやすい(…)

(片桐『全読解』・研究と評論)

○門は開けられず、扉越しに聞こえてきたのは、今日まさに再婚するのだと告げる衝撃的な妻の和歌であった。

(…)すでに再婚相手が来ているのだから女は門を開けるわけにはいかない。開けないで、(…)今夜の再婚を告げるしかなかった。男は、すでに新しい男が来ていると察知したのである。いさぎよく身を引く他に選択肢はなかったのである。(妹尾「読解考」)

○女が戸を開けないまま歌で新たな男の妻となったことを男に告げる。(…)梓弓章段では、女の「あらたまの……」歌により、男は女がもはや他人の妻となったことを知り、韓朋譚では后となった女が奴隷の身におとされた男の働いている清陵台へ出かけて男と再会し、そこで男は妻が自分にはもはや手の届かない存在になってしまったことを知る。(三木「韓朋譚」)

一首把握の現在地は、右のとおりである。そも、この歌の核心は、奈辺にあったのであろうか。そう素朴に問いかずにはいられないのである。歌が、「わかりやすい」ことが大事なのではあるまい。「戸惑う心」に発していることも、いまは措いておくべきであらう。

改めて、歌が、「……としの」と、「とし」を前置したうえでなお「三とせ」と詠まれたことを見つめたい。その事実・実態に留意したい。「女」が待ちつづけた時間としての「三とせ」、「女」の我慢の限界点としての「三とせ」が、「女」にとつては使わずにはいられぬことば、使うに堪え得る表現として詠み込まれたことを、何よりも大切に受けとめなければ一首を読んだことにはならないであらう、というのが本稿のここでの主張である。

三 「あづさゆみまゆみつきゆみ」歌の発意

「おとこ」の詠んだ「あづさゆみ」歌の主意が腰の句以下にあることはそれとして、一首は、なぜ「あづさゆみ」と歌い起こされ、さらに「まゆみつきゆみ」と継起されたのであつたらうか。本章段の、或る意味では大命題と言つてもよいそれは、依然として謎でありつづけている、と言つてよかるうが、とまれ、三たび、こんにちの理解に導かれてみよう。

○弓の羅列は（…）夫を選ぶにはどの男でも結構、の意を寓したとする解もあるが、とらない。ここは、語調よく畳みかけた序詞であり、本旨へのかかり方は、「槻」に「月」をひびかせて、「槻」↓（月）↓「年」という言葉の連想による。（…）「うるはし」は、（…）ここでは、新しい男の妻として誠意を尽くし、ひいては妻としての幸せを願う気持ちを言いこめている。一首は、もとの妻の再婚を祝う歌である。（鈴木『評解』・語釈）

○初・二句は、「つき弓」の「つき」を「月」に掛けて、その縁で「年」を導く序詞と解される。男の言いたいことは第三句以下、「年を経てわがせしがごとうるはしみせよ」の部分である。長年にわたつて私があるあなたにしたように、これからはあなたが新しい夫をうるわしんでやりなさいよ、と、恨み言はいっさい言わずに、これから始まる新しい夫婦生活にエールを送る。その態度には、単なるいさぎよさではない、精神の余裕からくる冷静さを感じられる。都での生活が汲々としたものではなくゆとりある状況であることが想像される。（…）この歌は女の詠んだ「あらたまの…」の歌に対する返歌としてはどうも不自然である。女の歌の言葉を受けた表現がないのである。（…）思うに、この歌は、（…）実はすでに来ている新しい夫に向かつて詠んでいるのだと思われる。（…）妻を再婚相手に託してエールを送っているのだ。（妹尾「読解考」）

○男は「新しい男によくしてやってくれ」と伝えて去って行く。韓朋譚では、（概要）に「彼女は『なぜ宋王に復

響しないのか』と問うたが、朋「金井注・男」は『あなたの心はもう自分から離れているだろう』という歌を返しただけだった。貞夫「金井注・女」はそれを聞くと血書をしたため、矢の先に結んで朋に向かって射た。朋はそれを読むと自ら命を絶った」とあり、(…) 梓弓章段の核となる(…) 男女の贈答歌に詠まれる「梓弓」は、この貞夫が矢に血書を結びつけ韓朋に向かって弓で射たことを踏まえて用いられているのではないか。

(三木「韓朋譚」)

読まれるとおりである。百歩譲って、本章段の「あづさゆみ」は、「韓朋譚」の「弓」に由来するのだとしよう。「つきゆみ」が配されたのは、次の「とし」を導くべき「つき」を内包しているからである、との理解も受け入れよう。しかし、果たして「まゆみ」はついに説かれず、結局、三つの「ゆみ」が連続する所以は、解き明かされぬままなのではないか。

ここで、和歌が歌われたもの、声音をもって発せられたものであることを、改めて想い起こしたい。「あづさゆみ」が、或る意味で唐突に用いられたのは、「み(mi)」音を含むからではないか、「あづさゆみまゆみつきゆみ」との表現が用いられたのは、そこに「み(mi)」が三たび繰り返されるからではないか、さらにそのうえで、その「み(mi)」を、つづく「とし」の語(音)に迎え承けさせるためではなかったか。試解として問うておきたい。

四 「あづさゆみひけどひかねど」歌の「身」と「心」

「おとし」の「あづさゆみ」歌の「み(mi)」に、右のとおり新たな解を与えてみると、「女」の「あづさゆみ」歌もまた新たな解釈をもって展かれることになるはずなのだが、ここでも、ひとまずは現在の解釈の地平を確認しておくとしよう。

○「引けど引かねど」は、あなたが私の気持ちを引きつけようが引きつけまいが、自分の本心は、の文脈になつてゐる。なお、この歌句を、他の男が私の気を引こうが引くまいが、と解する説もあるが、とらない。あくまでも自分と相手（もとの夫）との関係を言う表現である。（…）一首は、もとの夫への変わらぬ誠意を証そうとする歌である。
（鈴木『評解』・語釈）

○「あづさ弓ま弓つき弓年をへて…」と「あづさ弓引けど引かねど昔より…」という贈答は「年をへてわがせしごところるはしみせよ」という男のやさしい気持ちと「昔より心は君によりにしものを」という女の思いをみごとに表現していて、すばらしい。しかし、なぜ「弓」に関する問答というスタイルをとっているのか、わからない。
（片桐『全読解』・研究と評論）

○あづさ弓を引こうと引くまいと、昔から私の心はあなたの方に寄っていましたのに。この歌も初・二句の解釈はなかなか難しいが、「新編日本古典文学全集」の頭注に言う、「引く」は男が女の心を引くことをいい、あなたが私の心をひこうがひくまいが」のような意味か。いずれにせよ、女が言いたいことは第三句以下である。「むかしより心は君によりにしものを」、でも、あなたの心はもう私に寄らなくなったのね、というわけだ。／女は、これからは新しい男を愛してやれという男の歌を聞いて、夫にはもう自分への愛情はなくなったのだと思つたのである。自分は夫の留守中の三年間、ずっと夫のことを思い続けていたというのに、突然帰ってきた夫は、再婚のことを聞いても思いのほか平静で、そっけなく立ち去ろうとする。何のために戻ってきたのかも告げずに去っていく夫に、三年前まで表してくれていた愛情を感じられなくて、女はたまらなく悲しくなったのだ。（…）男が去って行くと、女はたまらず外に飛び出して男のあとを追って行った。この時点で、女は新しい夫を捨ててもとの夫のもとに走ったわけで、もはや女は家には戻れなくなってしまったのである。

（妹尾『読解考』）

○韓朋譚がこの章段の形成に関わっているならば、女が「梓弓引く」と詠んだ背景には、女の立場を思つて去ろうとする夫に、心変わりしていない証の血書をしたため矢に結び、弓を取つて夫に射かけた貞夫の故事が踏まえら

れていることになり、「梓弓引けど引かねど」には「夫に自分の誠心を証すために弓を引いた古の貞夫も、弓を引くすべのない今のこの私も」という、故事を踏まえた解釈も可能になるように思われる。何より、本文中に〈弓〉に関わる辞句がまったく出てこないこの章段において、物語の核となる問答歌になぜ唐突に「梓弓」が用いられるのが、説明可能となるのである。

(三木「韓朋譚」)

見られるとおり、解釈史・注釈史は、「おとこ」と「女」との贈答が「弓」に係る問答というかたちを取ることになった所以を追い求めながら、それを探りきれなかった。歌と歌とが備える機構を、ついに説き明かすことなく今日に至ったのである。

一首が、「心は」と、「心」を明瞭にして厳然と打ち出していたのに、対置ないし並置される可能性のある「身」を、なんら探りも問いもしてこなかったのは何故か。答えは一つ、「三とせ」に端を発する「mi」音の連鎖聯繫に、ついで気づき得なかったからである。

果たして一首の「身」を問わなかった、いや問えなかった注釈史ないし解釈史が、「おとこ」が「みみみみ」と連ねた三つめの「み(mi)」に含ませた「三」を切り返して、「女」は、「あづさゆみ」の「み(mi)」に、こんどは「身」を含ませたのである、といった把握を現前せしめることは、金輪際なかったのである。

五 「かきつけ」られた「あひおもはで」歌

章段掉尾の「あひおもはで」歌は、むろん「女」の詠んだ一首である。詠んで「女」は絶命する。女はなぜ死ななければならなかったのか、とは、妹尾「読解考」ならずとも、おのずと発せずにはいられなくなる問いであった、と言うべきであろう。諸書・諸論は、どう読んできたのであろうか。

「愛してくれなくて心が離れてしまった」のであろうか。加えて、一方の「人」は「人」で、突然の事態にただただ立ち尽くし、その抱きつづけてきた「ねむごろ」なる思いは、そのまま亡失消尽するところとなってしまったのであろうか。

『伊勢物語』第二十四段とは何であつたのか、改めて問わねばならないようである。

六 『伊勢物語』第二十四段とは何であつたのか

まずは、これまでに引照してきた諸書・諸論はいかに本章段を捉まえてきたのであつたか、確認しておこう。

○妻問いの掛け合いの言葉も二人の心と心をつなぎとめることができなかつた。というよりも、皮肉なことに、魂をふれ合わせる歌を詠みあえば詠みあうほど、女の再婚という事実が重々しく前提されることから、二人はいよいよ遠ざかるほかないように物語が展開していく。／妻は、立ち去る夫に追いつがろうとするが、ついに清水の湧くあたりで死んでしまう。その死に際して詠まれた歌が「あひ思はで」である。これまでの三首が万葉伝承歌などに連なる古風な歌であつたのに対して、これは新しい表現になっている。特に「わが身」がはかなく「消ゆ」とする表現は、むしろ『古今集』以後の王朝和歌の典型的な歌句である。(…)ここでの表現の新しさと、恋の人間関係を通して、わが身をはかない存在として自覚する点にある。／もとよりこの物語は、善良な男女三人が皮肉な運命の力に操られ、冷酷なまでの現実遭遇することを語っている。物語のそうした運命的な展開とあいまって、最終歌の運命への痛恨の発想が、さきだつ伝承古歌を包摂しながら、この章段の新しい主題を担うことになる。そこに、宿命的な女の悲劇性が際立たせられていよう。

○見事な歌の贈答とともに、自分がしたのと同じように新しい男を愛してやってほしいと女に言い残して去つてゆく男の愛の大きさは素晴らしいが、苦しい思いの中に待ち続けて三年、やっと新しい男を受け入れようとした女

に対する作者の処置は厳しい。あまりにも男中心の描き方になり過ぎていけると言うべきではないのか。『万葉集』時代の古歌めかした贈答を見事に作り上げて、女のあわれを描き切った作者の真意は、女の読者に対する貞女教育という点にあったのではないかと思われるのである。

(片桐「全読解」・まとめ)

○男に追いつくことができなかつた女は、先にも進めず後にも戻れず、そこで「いたづらにな」るしかなかつたのである。指から出る血で岩に和歌を書き付けたのも一種の自殺行為で、女は失血死による自殺をはかつたのかも知れない。何とも悲しい結末だが、これも軽率に再婚を決めてしまった女の不貞の報いであると作者は言いたいのであらうと思う。／(…)『伊勢物語』が結婚前の若い女性たちの愛読書になつてゐることを考慮して、結婚して妻となつた時には、たとえ夫が十分な愛情や思いやりを示してくれなくとも、安易に夫を捨てて他の男に走つてはろくな末路が待つていないぞというメッセージをこめた話を記さずにはられないような事情があつたのだらうと思われるのである。

(妹尾「読解考」)

○そもそも韓朋譚は、(…)物語の主役は、出仕したまま音信不通で帰つてこず、妻に会つても奴隷の身を恥じて顔を隠し、あきらめて妻の前から去らうとする韓朋ではなく、けなげに夫の留守を守り不在の夫の身を案じて長文の手紙を送り、王により后にされても決して王に靡かず、最後は策をめぐらし夫の後を追つて死ぬことで夫への誠を貫いた、妻の貞夫(貞女)であらう。／(…)それに対して梓弓章段では、女は運命のなすがままで、主体的な行動を取ることはない。(…)最後に見せた唯一の主体的な行動が去つて行つた男の後を追いかけることだが、(…)韓朋譚の女が男の死んだ場所まで訪ねて行つて身を投げたのとは大きな隔たりがあり、その死も韓朋譚の女のように自ら選んだものではなく、力尽きてそのままはかなくなつてしまふという受け身的なものであつた。／梓弓章段で、女がこのように造形されているのは、男を主人公とする『伊勢物語』が時折見せる、男に顧みられずに他の男の妻となつた女に対する厳しい姿勢を反映したものである。(…)『伊勢物語全読解』のいう「貞女教育」とまでいえるかどうかはともかく、夫に顧みられないからといって、夫を見限つて他の男の妻になることを厳しく戒めるものである。このような作者の視点から、韓朋譚を利用して章段を創造しようとする

ば、女主人公の貞夫は名前の通りの貞女であるから、章段に取り入れるには彼女の一端な夫への誠心を取り除いていく必要がある。(…) 韓朋譚の貞夫像を利用しながら、もとの男への愛情を取り戻し、必死に男を追いかける女の姿を描いていく。しかし(…)既に男は女を見限っていて彼女のもとに戻ることはないのであるから、(…)女はこの世から消えてしまうほかはない。／このように、(…)『伊勢物語』作者は、自らが物語で読者に示そうとした倫理観(…)にもとづいて、韓朋譚の女主人公の造形や行動を巧みにずらして物語を語っていく。韓朋譚と梓弓章段には、(…)物語が伝えようとするメッセージ自体に大きな位相差がある。このことを理解せずに、梓弓章段の筋立てや表現の単なる典拠として韓朋譚を扱うことは厳に慎むべきであろう。

(三木「韓朋譚」)

さて、卑見である。

「戸令」に準じてであったかどうかは措くとしても、それぞれに、しかし同じように強く意識しつづけた「三とせ」——「男」はこれ以上の延伸はできないとして帰郷を念い、「女」はこれ以上の忍従はできないとして再婚を想い、それぞれに意を決して歩を前に出したその日、事は皮肉なことに決定的に食い違つてゆく。

「おとこ」の開扉の要求に対して「戸」が開けられることはなく、その開かずの「戸」の向こうから「おとこ」の耳に聞こえてきたのは、今日まさに再婚するのだと告げる妻の衝撃的な和歌なのであった。

あらたまの年の三とせをまちわびてたゞこよひこそにゐまくらすれ

いま「衝撃的な」という形容句を用いたが、ここで明瞭に想像したいのは、先ず何よりも、和歌は歌われたのだ、ということだ。紙に書いたものが手渡されたのではない。手渡されたのであれば、たとえば「にゐまくら」の語がたまたま真つ先に眼に飛びこんでくることもあったであろう。しかし、ここはそうではない。初句から順に、じわじわ

と情報が迫り、押し寄せてくるのである。「a ra ta ma no」ふむ……「to shi no」mi to se wo」え？ ……「ma chi wa bi te」なに？ ……「ta da ko yo i ko so」まさか?! ……「ni i ma ku ra su re」……この結句の「ni・i・ma・ku・ra・su・re」の声音が「新枕すれ」という言葉に変換された瞬間の「おとこ」の心は、いかばかりであったか。いわば吃驚の企てのつもりが衝撃の超告白を喰らった恰好である。「女」にすれば、三年間の切なさ・つらさ、あるいは哀しさと寂しさといった諸々の負の感情をぶつける代わりに、新枕を交わすのだという事実を突きつけずにはいられなかつたということなのである。「おとこ」の激しい動揺や落胆、あるいは後悔の念などなど、いずれも想像して余りあると言うべきか。しかるに、「戸」の向こう側から声音＝言葉＝和歌が届けられた以上、今度はこちら側から向こう側へと返さねばならない。

「おとこ」は、冷静さを取り戻すかのように妻の和歌を改めて正面から受けとめ、

あづさゆみまゆみつきゆみとしをへてわがせしがごとうるはしみせよ

と詠む。——「ずっと私があなたにしてきたように、これからはあなたが新しい夫を大切にしたりやりなさいね」と、恨み言はいっさい言わずに、これから始まる新しい生活にエールを送ったのであった。

ただし、この歌、言われ来たつたとおり、初・二句は不明である。従前の説をいかに閱しても不分明さは残りつづけるほかあるまい。「あづさゆみ(梓弓)」や「まゆみ(真弓)」、あるいは「つきゆみ(槻弓)」についてどれだけ詳しく説明されても、というより詳説されればされるほど、「としをへて」以下への接続はその滑らかさを欠くことになるであろう。尤も、「槻弓」の「槻」に「月」が掛けられているという説だけは意味があるようにも思いが、それでも、その場合、「梓弓」と「真弓」はいかに、との疑問は残りつづけるであろう。

そこで、この歌についても、声音によって伝えられたのだという原点、「戸」を挟んで「おとこ」のいる外側から「女」のいる内側へと、音の連なりとして届けられたのという原態に帰ってみたい。

a zu sa yu mi } ma yu mi tsu ki yu mi } to shi wo he te }

いかがであろう、いまゴチック体にしてみたが、「mi」の音が三回にわたって繰り返されていることに改めて注意してみたい。殊に、繰り返されたうえでの三回目の「mi」は、それ相応に「女」の耳に残ったはずだが、その残響のなかに次の「to shi」の声音は届けられていったのである。そのとき、とはすなわち「mi」―「to shi」と音が連なったとき、「女」の意識下で「mi」は「三」に変換され、「年」へと接続した、これを裏返して、この歌は「女」によってそう受けとめられるように作られていたのだと考えるのは穿ちすぎであろうか。「女」が「まちわび」たと少なからず強調した「三年」、別言すれば「女」にとつては空白でしかなかった「三年」に対して、その三年を含んで今日まですずっと愛情を抱き注ぎつけてきたのだと自認する「おとこ」の内意が、「mi」音の繰り返しと「to shi」||「年」への接続の構造に込められていた、そう読んでみる事ができるように思うのである。

それにしても、「今日からはあなたが新しい夫を存分に愛してください」との言葉を贈るに際し、「わがせしがごと（||私がおあなたにしてきたように）」と、妻へのこの日までの不断の思慕敬愛の事実をさながら総括するように詠んだとき、「おとこ」のこの後の行動は既に決定づけられていたのだ、とは言えまいか。そもそも「女」が「戸」も開けず「こよひこそにゐまくらすれ」と詠んだことで、「戸」の内側には新しい夫がいると、「おとこ」が確信をもつて悟っていたとすれば、いさぎよく身を引く以外に選択肢は無かったとも言うべく、この「うるはしみせよ」の表現には、哀切・悲哀がより感じられようが、それはともかく、もう一つここで押さえておきたいのは、音声の持つ複奏性と多義性ということである。「おとこ」は歌を、一義的には「戸」の外からその内側にいる「女」に向けて詠んだ。だが、右でも触れたように「戸」の内側には新しい夫も居合わせていたとすれば、「歌」はその新たな夫の耳にも届いていたとみて間違いあるまい。一つの声音が複数人に届く、そういう複奏性を音声は当然のように帯びている。そのとき重要なのは、その音声の発する意味は一樣ではない、ということだ。そう、「おとこ」の歌は、新たな夫となるはずの「人」には、事実上、「今日からはあなたが妻をしっかりと愛してくださいよ」という意味を放ったは

ずなのである。

こうして「おとこ」は、最後の最後まで妻を愛しつづけ、あとは去りゆくばかりとなったのである。

さて、自分のことを愛するがゆえに戻り、愛するがゆえに自分の許から去ろうとする「おとこ」の心に気づいた「女」は、こう返歌せずにはいられなかった。

あづさゆみひけどひかねどむかしより心はきみによりにしものを

「おとこ」の歌の三種の「弓」、ではなくて、三たび繰り返される「yumi」の「mi」に「三」が響いていることを聴き取った「女」は、「おとこ」が用いたのと同じ語を初句に置きつつ同工異曲を奏でる。「a zu sa yu mi」のあとを「hi ke do hi ka ne do」と続けた。「引けど引かねど」である。引く／引かないに関わる「mi」とは何であろうか。そう、「身」である。「yumi」の「mi」に「三」を響かせた「おとこ」の歌に対し、「女」は「身」を響かせたのだ。それによって、今しも自分から引こうとしている「おとこ」の「身」に、昔からずっと寄り添わせてきたとする自分の「心」を対置させ、「おとこ」をつなぎとめようとしたのだ。ここでは、「女」の動揺が顕わである。「おとこ」は元々の夫からの歌が、あまりにも穏やかで慈しみに満ちていたからであろう。それとも一つ。最初の歌の段階で「今宵」の「新枕」という、「身」に関わる事柄をみずから告げてしまっていたこともあって、ここでは今さらながらに「心」を持ち出すほかなかったとも言えそうなる、いかにも苦しい歌であり、すでに意を決していたことが明らかな「おとこ」の気持ちを変えるには至らず、結局、「おとこ」はそのまま元来た道に戻ってしまっているのである。「女」は、たまらなく悲しくなる。思わず外に飛び出して、去っていく「おとこ」のあとを追うが、追いつくこと叶わず、湧き水のある所で倒れ伏してしまう。そうなった「女」は、そうであればこそ、追いかけた事実を、追いつこうとしたその思いを、せめて歌わずにはいられない。けれども、これまでどの決定的な違いは、声音の届くところに「耳」を持つ相手はいないということであった。歌は必然的に「かきつけ」られるほかなかったのである。加えて、着の身着の

ままたに飛び出した「女」が筆記する用具を持ち合わせている由はなく、もはやそうするしかない方法として「女」はみずから指を傷つけ、流した血で岩に「かきつけ」るのであった。

あひおもはでかれぬる人をとゞめかねわが身はいまぞきえはてぬめる

お互いの思いを一つにできないまま、去っていつてしまった夫を留められずに、我が身は今にも消え果ててしまいうのです——そう詠んで、「女」はそのまま絶命してしまつた、と語り納められている。

この歌は、どうあがいてもかなえられぬ絶望やいくらしめてもし尽くせぬ後悔が「とどめかね」という表現のなかに滲む、また、うすれゆく意識のなかで自己の生の最後の最後を見つめた証と無念さとが「める」という助動詞に刻印された、まさに絶唱であるわけだが、それにしても、「女」はなぜ死ななければならなかつたのであろうか。

ふり返つて、一つ前の「あづさゆみ引けど引かねど……」の歌に対する返歌もしないまま去つた「おとこ」を追いかけるべく「戸」を開けてしまつたその瞬間に、「女」は〈生〉の場を失つたのだ、とは言えまいか。「戸」を開くとは、「女」が「おとこ」＝元の夫の歌を介してその真意を改めて知らしめられ、関係の再構築に向かおうとすることであり、そうすることではか、「おとこ」の心に並ぶ自分の「心」を示す方法は無かつたのである。しかし、それはとりもなおさず、新たな夫を捨てるということに外ならなかつた。先に去つた「おとこ」が振り返つてくれる由はなく、またこちらから追いつき追いつがる術もなく、「戸」の内側にぼつねんと放置された「人」の許に戻る理もなく、「女」は後にも先にも進めず、まさに「そこに」留まりつづけるしかなくなつたのである。そうしてその身と心のそれまでの一切の営みが「いたづらに」なり、無へと帰していったのである。本章段における「女」の死とは、そういうものなのであつた。

ところで、そんな第二十四段を、「女」のあわれな末路を描いた、「女」に厳しい話と捉え、作者の意図を「女の読者に対する貞女教育」にあつたと片桐『全読解』は説いていた。再婚を決めたのは不貞であり、そんな軽率な行動を

とるからそういう報いを得るのだ、死にたくなければ言動を慎みなさい、と女性読者に教え知らしめるべく書かれた、というわけだが、いかかであろうか。

「あわれな末路」をたどったのは、さて、「女」だけなのであるうか。改めてふり返ってみれば、「おとこ」は、「こよひこそにゐまくらすれ」という「女」の声音を、新たな夫は、「むかしより心はきみによりにしものを」という「女」の声音を、それぞれ耳にした時点で、どちらも或る意味で、「女」との関係をどうするのかについての選択肢を失ったのだ。すなわち、「おとこ」は、前記したとおり「身」を引く以外になかったし、新たな夫は、「女」の飛び出していった空間から去る以外になかったのである。なぜなら、二人ともがそれぞれに「女」の幸せや幸いを思い、願ったからである。

「女」の死などまるで願ってもいない、むしろ幸せを願って立ち去った「おとこ」が、「女」の悲劇を知らぬままに生き、かつて哀苦をかこつ「女」に「ねむごろに」言い寄り、いま行く末の幸いを祈つて去る「人」（≡新たな夫）が、やはり「女」の悲劇を知らぬままに生きていくというもう一つの悲劇の幕は、すでに上がっているのであって、その演じ手たる男たちが「あわれな末路」の埒外にいるとは、とても見做し得ない。「女」の死を知ったときの二人の心中を表す言葉を、誰も持ち合わせないであろう。

あの「戸」のある居住空間は、いま、どうなっているだろう。言うまでもなく、かつて「おとこ」と「女」とが、あるいは「人」と「女」とが、身と心とを互いに添わせて時を同じうしたはずのそこには、もはや誰もいない。その虚無こそが、本章段を象徴しているように思われる。

「身」を、いつ、どこに、どう置くか。「心」は、いつ、どこで、どう示すか。その判断をひとつ誤るとき、身と心とを寄せ合った大切な存在を、誰もが、等しく失うことになる、そういうそれこそ厳しい側面を有する（男と女）の世界を、『伊勢物語』第二十四段は劇的に語り描いていた、そう考えてみるのである。

注

- (1) 片桐洋一『伊勢物語全読解』(和泉書院、二〇一三年)二二五～二二二頁参照。
- (2) 妹尾好信『伊勢物語』第二十四段「あづさ弓」読解考―女はなぜ死ななければならなかったのか―(『國語と國文學』第九十五卷 第五号、二〇一八年五月) 参照。
- (3) 三木雅博『伊勢物語』梓弓章段と韓朋譚―「弓矢」の「血書」に込められた女の誠心―(『中古文学』第一〇八号、二〇二一年一月) 参照。
- (4) 大井田晴彦校注『伊勢物語 現代語訳・索引付』(三弥井書店、二〇一九年) 六八～七〇頁参照。
- (5) 注(4) に同じ。
- (6) 注(4) に同じ。
- (7) 山田清市校『伊勢物語』(古典文庫 第二二九冊、一九六六年) に拠る。
- (8) 以下に引用する注釈書ならびに論攷とそれぞれの略称は次のとおりである。
 - ・鈴木日出男『伊勢物語評解』(筑摩書房、二〇一三年六月) ↓鈴木『評解』
 - ・片桐洋一『伊勢物語全読解』(和泉書院、二〇一三年一月) ↓片桐『全読解』
 - ・妹尾好信『伊勢物語』第二十四段「あづさ弓」読解考―女はなぜ死ななければならなかったのか―(『國語と國文學』第九十五卷 第五号、二〇一八年五月) ↓妹尾『読解考』
 - ・大井田晴彦校注『伊勢物語 現代語訳・索引付』(三弥井書店、二〇一九年一〇月) ↓大井田校注
 - ・三木雅博『伊勢物語』梓弓章段と韓朋譚―「弓矢」の「血書」に込められた女の誠心―(『中古文学』第一〇八号、二〇二一年一月) ↓三木『韓朋譚』

和歌は歌われたのだということ(金井)